

特別インタビュー【頭が良いとはどういうことか？】

東京大学大学院経済学研究科経済学部教授 アジア・ファイナンス学会会長 小林孝雄氏

インタビュアー 中学受験情報局主任相談員 西村則康氏

西村：今日はお忙しいところありがとうございます。

小林：どういたしまして。

西村：早速ですが、小林教授は日々東大の大学院生をご指導なさっているんですね。

小林：はい。

西村：やはり、東大の大学院生は皆出来るんでしょうね。

小林：もちろん！と言いたいところですが、残念ながら頼もしい大学院生ばかりと言う訳にはいきません。

西村：と言いますと？

小林：大学院生というのは、学生として勉強してもらわないといけないですし、研究者としての素養を身につけてもらわないといけないわけです。

学生としてみれば優秀だけれど研究者としてはそうでなかったり、テストの点数はほどほどなのに素晴らしい研究能力を持っている学生もいたりします。

当然両方とも優れた者も、両方ともダメという者もいますが。

西村：天下の東大でもあまり優秀ではない者はいる？

小林：ハッハッハ（笑）。それはそうですよ。しかも、経済学という実社会と密接に関わる学問をやっているわけですから、世間常識は必要ですし、科学的な探求心も必要ですから。

西村：いろいろな能力が高いレベルでバランスしていることが大切だと。

小林：それに越したことはありませんが、自分の頭で理解し、納得し、思考をどんどん展開していける力が研究者には何よりも必要です。

西村：なるほど。

小林：例を挙げましょうか？

西村：はい、是非お願いします。

小林：毎年、私の研究室全員総出であるテストの採点をやるのですが、採点スピードに2倍以上の開きが出るんです。速い者は猛烈に速い。しかも正確。

その逆に、見ていてじれったくなるような採点をする者もいるんですね。

ゆっくりやっても、採点間違いはするし、採点が首尾一貫していない。

西村：採点スピードとは処理能力ですよ。

小林：そうですね。解答のパターンを要領よく分けて、これはどのパターンの間違いだから3点減点だとか。解答の主旨を素早く読み取って、要領よく類別する能力の高い者がささっと採点していくのですね。

西村：その処理能力がどうなのでしょう？

小林：そうした処理能力の高い者は概して大学での筆記試験の成績も良いのですが、この処理能力と研究を進める能力はかなり違います。ゲームセンターでものすごいスピードで対戦できる人やテレビのクイズ番組で優勝するような人は、人並み外れた情報処理能力と運動能力を持っているわけですが、そうした能力と学問する上での能力が違うのは、分かっていたでしょう？

西村：はい、分かります。具体的には、どんな能力がより大切なのですか？

小林：仮説の立案能力とか構想力が、研究者に最も重要な能力です。これが、法則を発見したり理論を作ったりするのに必要な能力になりますが、それ以前の段階として、理論なり現象の因果関係を深いレベルで理解する能力が大切ですね。物事を自分の頭で理解する能力ですね。これを人々は、彼は直感が発達しているとか、地頭がいいとか言ったりするんだと思っています。

西村：地頭と言いますと？近頃いろいろなところで地頭という言葉聞くようですが。

小林：一般には、潜在能力の高さとか、生まれつきの頭の良さという意味で使われるのでしょうか。でも、物事をグッと自分の方に引き寄せて、自分の頭で考え、自分の思考の枠組みに取り込んでしまう能力、そんなに時間をかけて考えなくても人よりも深いところで理解できる能力を持っている人を、私は「あいつは地頭がいい」と言います。